

探究学習の現場から

第6回 上野学園中学校・高等学校

▶設立：1904年 ▶種別：全日制／普通科・音楽科／共学 ▶生徒数：1学年約200人
▶建学の精神：人間としての「自覚」を持つこと
▶2020年度合格実績：国立大は、秋田県立大、東京芸術大に、2人合格。私立大は、東京理科大、青山学院大、中央大、立教大、日本大、東洋大、千葉工業大、帝京大、東京農業大、桜美林大などに延べ263人が合格

上野学園高校の探究学習

内容	1年次は「自己探究」がテーマ。マインドマップの作成や個人の興味に基づく探究学習に取り組む。2、3年次は、自分の興味に応じてゼミに所属。チームでテーマを設定し、それぞれの方法で内容を深める。	
対象・期間・時数	・普通科、音楽科全ての生徒が1～3年次に履修 ・「総合的な探究の時間」(週1コマ)を活用	体制 ・探究科が全体をデザインし、各学年の教員が指導 ・大学教員や専門職の社会人、地域住民のサポートを受ける
テーマ例	※2020年度のテーマ(一部抜粋) 「体調の傾向と教育の変化」(保育福祉ゼミ)／「東京五輪後の台東区のホテルの今後」(人文ゼミ)／「持続可能な通学靴」(芸術表現ゼミ)など	評価方法 ・研究の内容とプレゼンなどの表現をルーブリックで評価 ・チーム内の生徒同士による相互評価の機会を設ける

「My Project」3年間の流れ(高校の例)

	1年次	2年次	3年次	
内容	<p>「自己探究」</p> <p>一人ひとりが興味、関心に基づき情報を集めて、マインドマップを作成。自分の適性を見つける。</p> <p>自分がより深く知りたいと思うテーマについて研究。大学の研究者や企業人に自らアポイントを取ってインタビューし、考えをまとめてポスター発表。</p>	<p>「ゼミ形式での探究」</p> <p>桜美林大学の探究プログラムに参加。チームでの探究活動のプロセスを体験し、全体のレベルアップをめざす。</p> <p>9つのゼミに分かれて、テーマごとにチームで研究を進める。</p> <p>3年12月に開催する「チャレンジステージ」で研究成果を発表。希望者は校外の探究コンテストに応募。</p>		

*取材を基に編集部で作成。



▲(写真上)廊下の壁のゼミごとの掲示スペース。生徒は自分の興味があることを付箋に書いて貼り、仲間を見つける。(左下)生徒がゼミ長を務める。3年生による下級生のサポートも。(右下)探究学習にはタブレット端末が欠かせない。



進路指導部主任 探究科主任

竹澤 陽介

たけざわ ようすけ ●教職歴16年。2014年度から中学校での探究活動の開発を始め、2018年度から高校での探究に携わる。2021年より現職。

なぜ、その大学、学部なのか？
進路選択の根拠を生み出す
「My Project」

学びたいことを見つける機会をつくる
本校が探究学習プログラム「My Project」をスタートさせたのは、2018年度からです。本校は都立の併願校というポジションのため、第一志望入学ではない生徒も一定数います。学びへのモチベーションが低く、漫然と高校生活を送る生徒も少なくありませんでした。大学進学では指定校推

薦に頼りがちで、ミスマッチから進学後に中退するケースもありました。こうした状況を変えるべく、「高校時代にやりたいことを見つけて、大学進学につなげる機会を用意したい」と考えたのが、この取り組みを始めたきっかけです。このプログラムはもともと上野学園中学校で行っていた「ワールドワーク」の授業を発展させたものです。本校が校舎を置く上野は、国立科学博物館や国立西洋美術館、上野恩賜公園など、教育資源に恵まれた場所。少し足を伸ばせば日本らしい文化が残っている浅草があり、外国人観光客にインタビューすることもできます。中学ではこの立地を生かし、校外に出て情報収集やレポートの作成に取り組みさせています。高校からは本格的に探究をスタートさせます。1年次は個人で取り組む「自己探究」がテーマ。マインドマップを作成し自分の興味を可視化したうえで課題を決め、大学の研究者や社会人にインタビューしながら、自身の考えをまとめます。2年次からはグループでの活動に移ります。1学期は桜美林大学が提供する探究プログラム「デイスカバ！」に参加し、チームで取り組む探究のプロセスを体験しま

す。このプログラムは最後に大学の研究者から評価を受けられるので、自分たちの探究活動のレベルを知り、足りない部分を自覚する機会としていきます。そして、2年次後半からは「社会学」「理工情報」「芸術表現」などの9つのゼミに分かれ、自分たちが設定したテーマを1年かけて深めていくこととなります。

コース、クラス、学校の壁を取っ払って
「My Project」を展開するにあたっては、学校の内外にある「壁」をできるだけ取り払いました。多くの人と関わり、多様な意見に触れる中でこそ、生徒は自分の興味や役割を自覚し、成長できると考えたからです。例えば、生徒はクラスの枠を越えて、自分の興味に合わせてゼミを選び、グループを組みます。各ゼミを担当する教員も、自分のクラス外の生徒や、専門外のテーマを指導します。教科の授業とは異なり型がないので、その場での生徒一人ひとりの様子を観察しながら、生きた授業を展開します。生徒の評価も、クラス担任、部活担任に加え、探究のゼミ担任も加わることで、より多角的な見方、アドバイスができ

* 思考やアイデアを整理する手法の一つ

取材・文／本間学 撮影／荒川潤

るようにになりました。加えて生徒には、学校の壁を越えて大学の研究者や大学生、地域の方々の話を聞くことを推奨しています。そもそも本やネットで調べればすぐに答えが出るようなテーマは認めていないため、自分でアンケートを取ったり、専門家に質問したりしなければ答えにたどり着けません。自分の手でつかんだ一次情報があるからこそ、生徒は自分の探究を自信を持って語るようになるのです。ゼミではICTも積極的に活用しています。1人1台、タブレット端末を所持し、情報収集やアイデアの共有、アンケートの分析、発表のまとめなどにどんどん使っています。今では生徒同士、生徒・教員間のコミュニケーションもなくてはならないものになっています。

何が好きでどんなことをやりたいのか答えられるようになったこと。その結果、志望理由を自分の言葉で、根拠を持って言えるようになり、総合型選抜で学びたい大学に挑戦する生徒が増えていきます。中学入学時に「人と話すのが苦手」と言っていたある生徒は、探究で訪れた浅草で外国人にインタビューするうちに観光に興味を持ち始め、上野周辺のホテルを全て現地調査し、地域の活性化について研究しました。今、その生徒は観光学部に進学し、「大学での学びが楽しい」と報告してくれています。この生徒のように、大学で学ぶことを楽しみに思う生徒をもっと増やしたい。そのためには「My Project」をより充実させ、大学との連携も強化していきたいと考えています。

根拠を持って志望理由を言語化
探究プログラムを始める前と後で、大きく変わったのが、「Who are you?」と問われたときに、生徒が自分

大学への期待

高校生と研究者をつなぐ オフィスアワーを設けて

探究学習には、専門家の助言が欠かせません。メールやオンラインでも構わないので、生徒が大学の先生に気軽に質問できる、高校生向けのオフィスアワーがあるとうれしいですね。「○○について探究したい人募集!」みたいな形で大学の研究室を生徒に聞くような広報のしかたもあるのではないのでしょうか。